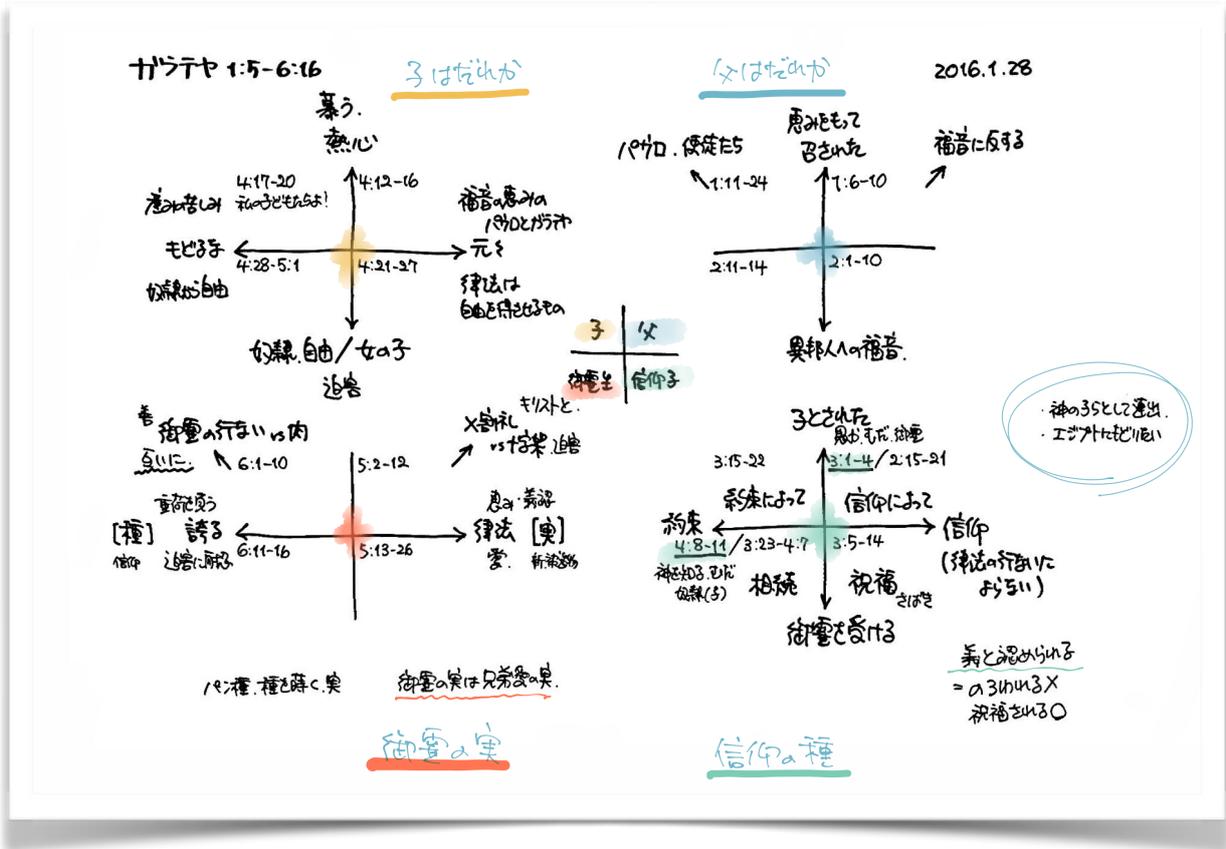




# ガラテヤ人への手紙 1-6章 ガラテヤ人への手紙



ガラテヤ人への手紙の分析をしてきました。今までやってきたところで、大きく変わったところがあります。3つの段落で、問題は何か。そして、真理があつて、解決。どう歩むべきかというふうを考えていたのですけれど、それで、真ん中を分析しようとしていたのですけれど、なかなかうまくいかなくて…。

大きく変わったところの転換点は、ケパがアンテオケに来た時に、避難すべきところがあったのと言ってパウロが話すところです。かき乱す者たちに騙されたペテロたちというところで、パウロが話してケパに言いますというところのカギかっこが、2章14節から2章21節までというふうにこの新改訳では、なっていますけれど、新改訳の14節のところに☆印が2つあって、「14節までです」ということでも可能ですと書いてありました。確かに14節だけが言った内容だというふうに考えると、全体の構成がもっとすっきりする。なるほど、そういうことかということで、そこを分けたので、大きく4つに分かれることになりました。

1章から2章14節まで、2章15節から4章11節まで、4章12節から5章1節まで、5章2節から6章16節まで。出だしが、1章1節から3節と、4節から5節。2つ「恵みがありますように」「神の栄光がありますように」という言い方になっていますけれど、片方は「パウロが使徒になったのは、人間から出たことではない、血肉によらない使徒である。死者の中から蘇らせてくださった父なる神によった」というのが最初です。もう一つは「私たちが罪のためにご自身をお捨てになったキリスト。そのキリストが悪の世界から

私たちを救い出そうとした。その父である方の御心によった」という父からの教えというのが、このガラテヤの導入で強調されています。

「じゃあ、子どもたちは誰ですか」という話なのですけれど、まるで、神の子らとして連れ出された教会なのに、またエジプトに戻ろうとしている、また奴隷に戻ろうとしているという、生まれたのに、死のうとしているということで、そこから連れ出す。「もう一度生み出さないといけないのですか」という言い方もありますね。

私たちの分析だと、ガラテヤ人への手紙は、「殺してはならない」ということに対して、「御霊によって歩みなさい。御霊によって生きる者になりなさい。いのちを得なさい。兄弟と共にいのちの道を歩むように。」ということが、第6番目の命令の肯定的な表現として与えられている手紙だと考えています。

まさに、そのエジプトに戻りたい。奴隷に戻りたい。死にたいと言っているのと、生きるのは大変だから死にたい。戦いが大変だから戻りたいというその人たちをもう一度呼び戻す。最初の愛から離れてしまった人たちを連れ戻すための手紙ということで位置付けられるのだと思います。

自由になるように、自由になるようにということを言っているのに、6章の最後の挨拶のところで、「私を困らせないでください。私はキリストの奴隷です。」と言って終わるのですね。「この身にイエスの焼き印を帯びているのですから。」これは、奴隷のしるし。イエス・キリストの名前が焼き印として押されている。迫害された傷も焼き印のようなものになっている。キリストの焼き印ということなのだと思います。自由にされた私たちはキリストの奴隷ですと。キリストの奴隷として生まれたのですということ全体で話しているということです。

最初の段落では、「だれが父なのか」。次の段落では、アブラハムの話がたくさん出てきます。「信仰の父の子どもである」ということが、2番目の段落。3番目は、「誰が子どもなのですか、どういう子どもなのですか」ということが話されて、(4番目は)「だから、御霊によって歩みなさい、御霊によって生きた者となりなさい。それが、子どもです」。約束はこれですということですね。

その違いがあって、分析をしていきますけれど、2番目の段落だと、3章1節から4節のところに、「ああ、愚かなガラテヤ人」4章8節からのところで、「神を知らなかった、神を知っているのに、神に知られているのに」という言い方で、知っていること、愚かな知恵がないことで、囲まれている感じですが、(3:14/2:15-21)「あれほどのことを経験したのは無駄だったのですか」と。こちら(4:8-11/3:23-4:7)も「あなたがたのために労したのは無駄だったのですか」というようなことで、呼応していますね。

それで、分析してみると、子とされることと(上)、御霊を受けること(下)。信仰によって子とされる(右)。約束の子どもである(左)というような並行がここに書いてあります。

それで、義と認められるという話がよく言われますけれど、ここで、義と認めらる、のろわれたものとなっている、祝福されているというのは、祝福そのものを受けるということではなくて、祝福とのろいに分けて、祝福を与える者になりましたというのが義と認められる(右側)。祝福を与えられるということが決まりましたので、その祝福の相続分を受けるというのが、こちら(左側)の段落ですね。

ここ(3段落目)がわかりにくいのですかね。上が熱心でお互いに慕い合う。下が自由の子どもは奴隷の子どもと一緒にあってはいけないという、分かれるほうと(下)、ひとつであるほう(上)。元々は(右)、福音の恵みによって救われた(4:12-16)。律法は自由を

得させるものだったのに(4:21-27)、奴隷に戻ろうとしている(4:28-5:1)、もう一回産みの苦しみをしている(4:17-20)という、元々と、戻るなという。こちら(右側)は、約束の地に入ったほうで、あちら(左側)は、元の状態に戻るな。「もう一度」ということばも、ここ(2番目の段落)の最後で強調されて、ここ(3段落目)の段落にも、(右側)2つとも「もう一度」ということばが繰り返しになっています。

(4段落目は)御霊を受けるところには、パン種、種を蒔く、実を結ぶという話が、よく出ています。こちら(2段落目)の信仰の話は、どちらかというところ種の話です。子孫の話ですから、信仰の種の話をしていて、この信仰の種が、御霊の実を結ぶ(4段落目)、そして、御霊の段落ということになると思います。

こちら(4段落目)のクロスしているほう(5:2-12/6:11-16)は、割礼ではありません。「大事なのは割礼ではないです、大事なのは割礼ではないです」と言って、十字架の話をしていきます。十字架と割礼は似ているようなものです。本当の約束を信じて割礼を受けるということは、十字架を信じていのちを受けることと似ているのに、割礼自体にとどまっているという話ですからね。割礼自体が救いだと思っているということです。

こちら(6:1-10/5:13-26)は御霊の行い。肉の行いなのか、御霊の行いなのかとやっているところで、「互いに、互いに」と言っているのが、5章13節から26節まで。出だしのところで、「愛をもって互いに仕えなさい。律法はあなたの隣人をあなた自身を愛せよという一語をもって全うされます」と言って、「互いに、互いに」それで、25節も、「互いに、互いに」ということを話しています。6章1節から10節は、また「兄弟たち」というふうに言って、互いの重荷を負い合う。教えあう。良いものを分ける。互いに…ということが、こちらの御霊の行いのほう。

互いにと言っているほう(6:1-10/5:13-26)と、こちらのクロスのほう(5:2-12/6:11-16)は「キリストから離れない」。互いに愛し合う(6:1-10/5:13-26)、キリストから離れない(5:2-12/6:11-16)というのが、御霊の与えられている、御霊の実を結んでいるところだと思います。

よく知っている御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容…これは、よく知っているところなのですけれど、これが、互いにという話の実だということは重大なところです。単に喜んでいればいいという話ではなく、神様を愛しているという話よりも、ここで強調されている愛は、肉の行いのほうも、相手に対して、相手を悪と罪に引きずり戻す。不品行、汚れ、好色、偶像礼拝。そして、争い、妬み、分派、分裂、党派心。これはみな、互いの話です。御霊の実のほうも、だから、兄弟愛の話をしている。兄弟の愛。兄弟を喜ぶ、兄弟同士が平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制している。これは、律法なのです。こういうものを禁ずる律法はないですと言っているこの律法のほうは、御霊の実の話をしています。

こちら(右側)は、前半は実。後半(左側)は、重荷を負う、迫害に耐える。誇ることをしない。何を誇るのかという話をして、信仰の重荷を負うのが種として死ぬと。そうすれば、御霊の実を結びますということなので、こちら(左側)が種でこちら(右側)が実と言えます。

この段落(5:2-12)とこの段落(6:11-16)に、割礼を受けるというのは大事ではなくて、愛によって働く信仰が大事ですということを言います(5:2-12)。愛によって働く信仰は、こちら側(6:11-16)なのです、実はね。最後のところは、割礼を受けているか、受けていないかは大事なことでありません。大事なのは、新しく造られること、新しく生まれること。新しい被造物ですということで、こちら(左側)に書いてあることは、あちら(右

側)に。あちら(右側)にかいてあることは、こちら(左側)に…ということで、一致しているものだと思います。

1段落目の、パウロは「福音に反する人たち、かき乱す者は呪われよ」と言って(1:6-10)、(呪われるということばが、普通のことばと違うようでしたけれど)。ここは(2:11-14)、ペテロたちがそういう状態になっているので懲らしめているという実際の話がここ(1:6-10/2:11-14)にあります。

パウロは、新しい肉と血によらない使徒です(1:11-24)。尚且つ、肉中の肉だった。割礼を受けるどころでの話ではなく、全部守れというパリサイ人だった。その肉中の肉だった者から、肉ではない使徒になった。それで、異邦人への福音を宣べ伝える責任を与えられて(2:1-10)、ペテロたちは異邦人たちと食べたりして、キリストと一緒にいて、迫害を受けるほうだったのに、こんどは、割礼を受けている人たちに対しての伝道者になっているという意味でも逆転しているような感じです。

恵みをもって召された。そして、福音を宣べ伝える責任があります。それが、父たちの戦い。父たち、私たちは本当の使徒ですというふうには言わないと、かき乱す者たちは、そこに反対する。「パウロは使徒じゃない」という。それが第2コリント。「パウロは使徒です」ということを強調する意味はそこにあります。出だしのところで、私たちは本物の父です。新しいアブラハムの子孫ですと言わないとそのあとが崩れてしまいますから、まずはそこで強調して、尚且つそこでも戦いがあるということは、ここでも言っています。

こちら(1段落目)はパウロの証で、こちら(3段落目)は、ガラテヤの人の証もありましたよね。「ガラテヤの人たちは熱心だったでしょ」というふうに話したりしていますから、全体として、新しい時代の新しい出エジプト。新しい割礼、本物の割礼の意味はこうですということをお話しているのが、このガラテヤ人への手紙だと思います。